

よい語りわるい語り 赤字にしてはいけない

毎日、日本のあちこちで子どもを意識したさまざまな語りや絵本の読み語りや朗読のサークル会が開かれている。

なかみは乳児向きからヤング向きまで、アマからプロまで、ほんとうに千差万別だ。

ただ、必ず共通するのは、ただではできないこと。

手弁当でやるといっても、最低でも会場費とチラシの印刷代や送料はかかる。

講師を呼ぶとなればその謝金と交通費。遠方なら宿泊費もかかる。

主催が学校とか図書館とか教育委員会とかなら、あらかじめ組んである予算からだすので、そんなに心配はない。

その金額の中でできることをしようと考えればいい。

だが民間は大変だ。

おかあさんたちがサークルを立ち上げて自主興行をしようとなったとき、当座の数万円を誰が負担するかというだけでも悩まなければならない。

とくに外部から講師を呼ぼうということになれば、それなりのお金はいる。

その資金をどう調達するか。もしかしたら戻ってこないかもしれない。

こういうとき、経験がないグループだと

まず参加費を設定し、何人来てくれれば黒字になるかという計算をする。

さらに会場で物を売れば、そちらからも収益が上がるから全体が楽になると考える。

ところが、これがやってみるとそうそう計算通りにはいかない。

たとえば、図書館や学校でなく、個人やグループで、ぼくのものがたりライブや講演会を企画してくれるところがある。

「地域の子どもたちにもものがたりを届けたい」とか「親子でいっしょに楽しむ時間をもちたい」とか、あたたかい志がある。

もちろん、ぼくも日程さえ折り合えば、日本中どこでもおじゃまさせてもらう。

だが、最初から大勢の参加者が来るわけではない。

一番の原因はぼくの集客力のなさにしても、それだけでなくとも

当日何人来るかは、ふたをあけてみないとわからない。

台風や雪はもちろん、雨が降っただけでも人は減る。

土日なら、近所で開かれている他のイベントとかさなることもある。

とくに地方では学校行事が入ろうものなら、子どもの集客はほぼ無理だ。

逆に子どもが来たいと言っても、親に予定があれば車をだすことができないからやはりむずかしい。

お金がどれだけ入るかは最後まで水ものだ。

そこで、少しわかってくると役場やさまざまな公共機関の補助金をえようと考える。

こちらが知らないだけで、子どもの福祉や教育のために用意されているお金は、あちこちにあることはある。

これをもらえれば資金繰りの苦勞から解放される。

ただ、手続きがめんどくさい。

もちろん、税金を使うのだから審査があるのは当然だ。

こちらの身元を明かすのも、使い道の予定計画をだすのも当然で事後報告をするのも当然だ。

だから手続きがめんどくさいのは当然受け入れるべきだが問題がないでもない。

補助金によっては、お金だけでなく口も出してくることだ。

こども夢基金では「会場内でものを売ってはいけない」と一項入っている。

これはよくない。

そのお金を使うものは永遠に補助金の奴隷になってしまう。

補助金は本来、民間の自主的な活動を支えるためにある。

「今は補助金をだしてあげるから、それで支えている間に財源を作って自立できるようになりなさい」と励ますように出てくるものでなければいけない。そして、そのサークルが自立できるようになったら、その補助金をまた別の新しいグループを支えるために使えばいいのだ。

だが、ここで「販売をしてはいけない」といったら、そのサークルはいつまでたっても補助金をもらわないとやっていけないことになる。

すると、こわいことに自分たちで会費を集めるとか参加費をとるとかの強い気持ちが萎え、毎年「お金をください」と役所に頼らなければ話が進まない依存体質になってしまう。

そうなると、たまたまある年に補助金がもらえないと、もう終わりだ。

これはつまり、行政が民間のサークルを育てられなかったということに他ならない。

財源はすなわち、参加費とグッズだが

参加費のことはまた別の機会にして、売り場のことを書く。

売り場は絶対あった方がいい。

まず第一に単純にあった方が楽しい。

バザールは人を浮き立たせる。

会が始まる前と後にちょっとした時間つぶしになるし、新しいものとの出会いがある。

一番多いのは本やパンフだが、手先の器用な人がちょっとした手芸品などをだすのもいい。

自分が作ったものが目の前でお金に変わるのはなんとも嬉しいものだ。年配者で、生活に余裕のある人の集まりなら、実用的なものでなくともご祝儀で買ってくれることもある。

家族連れは何人いても財布は一つだし、みんながみんな、ふところ具合がいいわけではないがそれでも買ってくれる人はいる。

とにかく、語りの会でも朗読会でも、一回こっきりのつもりのイベントなら赤字でもいい。

ちょっとしたお祭りだし、「おいしいものを食べに行った」とか「旅行に行った」と思えばすむことだ。

だが、たとえば「地域の子どもたちのために」とかなにかの意志があるのなら継続させなければならない。

そして、継続させようとするなら、絶対赤字にしてはいけない。次回のお金をプールできるように考えて予算を組み、スタッフの交通費くらい出せたらいいし、最低でも打ち上げのときにスタッフみんなでおいしいものを食べられるくらいのお金は残したい。

その楽しい気分が、次回またやろうねという気持ちにつながるのだ。

以前、関西のある町のコミュニティセンターで、あたりに住む親のグループが、ぼくの講演会を主催してくれたことがある話が決まり、現地に行く前に「本は売れますか」と主催者にたずねた。ぼくは若いお母さんたちの自主的な会は応援したいし、日程さえ折り合えばなるべくおじゃまするようにしている。まして「この会を開くために資金作りバザーをやりました」などという話を聞かされると手弁当でも行こうと思う。だが赤字をだしてまでは行けない。けちなのではなく、それでは自分も続かないからだ。そこでせめてものことに自分の本やポスターを売ればそこからいづらか実入りがあるし…と考える。自給自足で人に迷惑はかけない。

で、ぼくの問い合わせをうけた主催者が今度は会場に問い合わせ、

そこでは売れないとわかり、おりにかえし電話をくれた。

小淵沢と関西との電話でのやり取りだし、

ここでぼくが、だだをこねると、こまるのは間にはさまれた

主催者グループだとわかるから、「わかりました」と明るく返事して終わった。

ところが当日、会場に行くと、そのコミュニティセンターの担当者があいさつに来てくれた。

で、名刺を交換して雑談しているうちに、話の流れの中で「販売ができなくて残念です。

こういう時代、行政も子どもたちの手に本が渡るチャンスをあちこちで作った方がいいです」と言ってみた。

すると、その担当者が「ほんとうにそうですね。でも、公共の場ですからしかたないです」と、笑ってかわそうとしたのだ。

ムツとした。

まず、「公共の場以外、どこが借りられるというんだ」といいかえしたくなる。

ふつうのうちに大人が 50 人も入るものか。

また「こういう会場では売るべきではない。なぜなら…」と理由があつて言うならそれはそれで意見を戦わせる余地がある。

結果、互いに折れ合ってもっとよい地点にたどりつけるかもしれない。

だが「ほんとにそうですね」とまるで味方のような顔をして流そうとするのは、ずるい。

これは子ども夢基金でも似た言い方をされたことがある。

「補助金をもらおうと販売はできないからしかたないですよー」と平然と言われた。

公務員は条例を守る義務がある。これは当然だ。

善意に基づく多少の逸脱、多少の見て見ぬふり、多少の拡大解釈は

あるにしても、公務員は率先して法や条例を守り履行しなければならない。

だがそれは同時に「この条例はおかしいと思ったら、いい条例に直そうと努力する」という姿勢とセットでなければならないはずだ。

そうでなければ町はよくなる。

悪法は悪法のままで、法だからしかたない。守れ。決めたのはおれじゃない」と、あぐらをかいたままで終ってしまう。

最低限「こういう意見や要望がありました」と上にあげてほしい。

いい先生や司書さんや館長さんは大勢知っている。

だが、下品を承知で書くが、この時はそれこそ時代劇に出てくる

「この木っ端役人め」という言い回しが頭に浮かんだ。